

研 究 報 告

Collaborative Reflection の概念分析
— Walker & Avant の手法を用いて —

小山 理英

Concept Analysis of Collaborative Reflection:
Using the Strategies for Proposed by Walker and Avant

Rie Oyama

キーワード： Collaborative Reflection, 概念分析, Walker & Avant

key words : collaborative reflection, concept analysis, Walker & Avant

Abstract

This study aims to propose a definition of the concept of “collaborative reflection” by analyzing its structure using the concept analysis method described by Walker and Avant. A literature search with the keyword, “collaborative reflection” identified 16 items published in and outside Japan, from which three antecedents, seven attributes, and four consequences were extracted. Based on the results of the literature search, collaborative reflection was defined as, “A series of process of thinking to perform reflection of oneself triggered by dilemma and perplexity, and to act for a solution to the problem, and to switch the experience of others to own learning by talking with a great variety of people about the experience, and to bring synergy of the reflection.” Findings from this study suggested that collaborative reflection is effective in real-world nursing settings where interprofessional collaboration is the key.

要 旨

本研究の目的は、Walker & Avantの概念分析法を用いて“collaborative reflection”という概念の構造を分析し、定義を明らかにすることである。“collaborative reflection”をキーワードにして検索できた日本国外のArticleとPaperの16文献から、3つの先行要件、7つの属性、4つの帰結を導き出した。その結果から、“collaborative reflection”を、“ジレンマや困惑をきっかけに自分自身をリフレクションして問題解決に向けて行動し、その経験を多種多様な人々と語り合うことで、他者の経験をも自分の学びに転換し、リフレクションの相乗効果をもたらす一連の思考過程”と定義した。多職種連携が重要視される看護実践の場においては、“collaborative reflection”が有用であることが示唆された。

I. はじめに

リフレクション (reflection) は、デューイ (John Dewey) が1930年代に提唱した反省的思考 (reflective thinking) に始まる概念である。デューイは経験によって生じた疑念を探究する行為が、螺旋状に連続した新たな経験の基礎となる (Dewey, 1938/2004, p.128) と述べ、経験の重要性を説いている。1980年代以降、デューイの理論はショーン (Donald Schön) によって発展し、ショーンは“行為の中のリフレクション (Reflection-in-Action)”によって、専門的実践家が実践知を生み出していることを明らかにした (Schön, 1983)。

日本では2000年頃より看護におけるリフレクション研究が進められている。看護実践の場では、日々変化する人々の状態を観察し、必要な援助を計画し、実施、評価する必要がある。その際、実施した看護を意図的にリフレクションすることで、その結果の意味づけをし、次の看護に活かすことができる。先行研究では、リフレクションにより、【新たな自己への気付き】、【課題の発見】、【視野の広がり】、【意識変容】、【成長】、【行動変容】が起こることが明らかになっている (小山, 2019)。近年では、授業リフレクション (目黒・永井・貝瀬他, 2016) や、マネジメントリフレクション (河野, 2013) など、リフレクション研究の対象は拡大している。また、リフレクションの方法においては、グループでのリフレクションの有効性が明らかになっており (渋谷, 2001)、対話的グループリフレクションが臨床での経験学習支援を導くこと (青木, 2014) や、自己の課題を明確にし、成長を導くことが明らかになっている (村松・渡辺, 2008)。更に、多職種でのグループリフレクションが、エンパワーメントを促進するという報告もある (青木・Ghaye・Lillyman, 2011)。しかし、対話的グループリフレクションやグループリフレクションに関する定義はなされておらず、その概念も曖昧なままであった。そのため、日本国外の文献に目を向け、“対話”、“グループ”、“複数人”でのリフレクションを意味していると期待できる「collaborative reflection」(以下、C.R.) に焦点をあてた。

日本国内でリフレクション研究が始まった2000年頃より、日本国外ではC.R.の研究が進んできた。効果的なネットワーク学習の方法を検討した文献 (Kim & Lee, 2002) がC.R.研究の始まりである。彼らは個人のリフレクションで自分自身を再構成した上で、グループディスカッションを行う必要性を説いている。更にその後の研究では、C.R.がグループで思考を深め、経験を共有することで相乗効果をもたらす (Degeling & Prilla, 2011)、専門職としてのアイデンティティを確立し、リフレクションの効果が高まると報告されている (Binyamin, 2018)。しかし、これまでC.R.の概念分析はなされておらず、Veenらの「医学生が経験を

習サイクルの一部」(Veen & Croix, 2017) と、Degelingらの「経験をリフレクションし、評価して、将来のために学び、職場で学ぶための仕組み」(Degeling & Prilla, 2011) という位置づけに留まっていた。C.R.は、「対話」「グループ」のリフレクションに関連し、多職種と共にチームで患者に関わる看護職にとって、有用な概念ではないかと考えた。しかし、これまでのC.R.の定義は、看護に特化しておらず、その用法は明らかにされていない。そのため、看護実践の場におけるC.R.の有用性を検討するために、C.R.の概念の構造を分析し、定義を明らかにする必要があると考えた。

II. 目的

本研究の目的は、C.R.に関する文献を探究し、Walker & Avantの概念分析アプローチ法 (Walker & Avant, 2005/2008) を用いてC.R.という概念の構造を分析し、定義を明らかにすることである。

III. 方法

A. 対象文献の検索

文献の検索期間は、2009年1月から2019年12月までの10年間とした。検索用語はC.R.とし、医学中央雑誌web版、CiNii、PubMed、CINAHLを用いて看護学に限らず幅広い分野の文献を検索した。しかし、過去10年間での文献数が少なかつたため、C.R.研究が始まったと考えられる2002年まで遡り、文献の検索期間を拡大した。

B. 概念分析の手法

本研究では、Walker & Avant(2005/2008) の概念分析の手法を用いた。Walker & Avantの概念分析は、概念を構成する属性 (attributes)、概念に先だって生じる先行要件 (antecedents)、概念によって生じる帰結 (consequences) から概念を検証し、理論の中の曖昧な概念を明確に再定義することに役立つ方法である。具体的には、①概念を選択する、②分析のねらいを決定する、③概念の用法を明らかにする、④概念を定義づける属性を明らかにする、⑤モデル例を明らかにする、⑥補足例を明らかにする、⑦先行要件と帰結を明らかにする、⑧経験的指示対象 (empirical referent) を明らかにする、という8段階を辿る。

C. 分析方法

Walker & Avant(2005/2008) の概念分析の手法に沿って、本研究で対象とする概念をC.R.とした。更に、C.R.の概念の構造について分析し、定義を明らかにすることを分析のねらいとした。具体的な分析の方法として、まず、文献を精読して文献リストに分類し、全体の概要を明らかにした後、先行要件と属性、そして帰結について記述されている内容を抜粋してコード

とした。次に、コードを最小単位として意味内容の類似するデータのまとまりを作り、その類似性を的確に表す表現を探し命名するという一連の分析過程を辿った。なお、モデル例と補足例については、事例を作成しC.R.の概念との関連性について説明した。

IV. 結果

A. 対象文献の概要

文献検索の結果、ArticleとPaperの16文献が検索できた。分析リストに沿って整理し、教育に関する12文献と、医療従事者に関する4文献に大別できた(表1)。教育に関する12文献のうち、教員に関する文献は8文献で、学生に関する文献は2文献であった。また、教育者と学生双方の関わりに関する文献と、教

員同士のコミュニティに関する文献はそれぞれ1文献ずつであった。なお、医療従事者に関する文献のうち看護師に関する文献は1文献のみであった。

B. 対象文献で示された概念の用法

C.R.においては、まずは自分自身でリフレクションを行い、その際に、自らの経験をリフレクションに移行する必要性が述べられていた(Veen & Croix, 2017)。更に、教育者自身が実践について学ぶ状況を作り出し(Mede, 2010)、教員と学生の道徳的で感情的なりフレクションが存在する必要性(Tigelaar, Dolmans, Meijer, et al., 2008)があるとされていた。また、C.R.について、“医学生の学習サイクルの一部”(Veen & Croix, 2017)や、“会議を有効にする”(Tigelaar, Dolmans, Meijer, et al., 2008)など、学習サイクルという思考過程を意味している文献と、会議などの実在する場

表1. 文献リスト

NO.	著者 (発行年)	論文種類	テーマ	対象
1	Binyamin, G. (2018)	Article	Growing from dilemmas: developing a professional identity through collaborative reflections on relational dilemmas	作業療法士
2	Loh, J. et al. (2017)	Article	Transforming Teaching through Collaborative Reflection: A Singaporean Case Study	教員
3	Veen, M. et al. (2017)	Article	Collaborative Reflection Under the Microscope: Using Conversation Analysis to Study the Transition From Case Presentation to Discussion in GP Residents' Experience Sharing Sessions	医学部生
4	Clara, M. et al. (2015)	Article	Can massive communities of teachers facilitate collaborative reflection? Fractal design as a possible answer	教員
5	Kidd, M. et al. (2016)	Article	Using visual art and collaborative reflection to explore medical attitudes toward vulnerable persons	医療従事者と開業医
6	Murray, E. (2015)	Article	Improving Teaching Through Collaborative Reflective Teaching Cycles	教員
7	Flores, R. et al. (2014)	Article	From Evaluation to Collaborative Reflection : Teacher Candidate perceptions of a Digital Learner-Centered Classroom Observation Form	教員候補者
8	Kurczek, J. (2014)	Article	The student as teacher : reflection on collaborative learning in a senior seminar	学習者と教員
9	Kim, M. et al. (2013)	Article	Teacher's Reflection of Inquiry Teaching in Finland Before and During An In-Service Program: Examination By A Progress Model of Collaborative Reflection	教員
10	Lin, H-S. et al. (2013)	Original Article	The impact of collaborative reflection on teachers inquiry teaching	教員
11	Epler, C. M. et al. (2013)	Article	The Influence of Collaborative Reflection and Think-Aloud Protocols on Pre-Service Teachers' Reflection: A Mixed Methods Approach	教員
12	Degeling, M. et al. (2011)	Paper	Modes of collaborative reflection	学生
13	Mede, E. (2010)	Article	The effects of collaborative reflection on EFL teaching	教員
14	Tigelaar, D. E. H. et al. (2008)	Article	Teachers, Interactions and their Collaborative Reflection Processes during Peer Meetings.	教員と学生 教員と教員
15	Durham, L. et al. (2006)	Original Article	Critical care outreach 2 : Uncovering the underpinning philosophy and knowledge through collaborative reflection	看護師
16	Kim, D. et al. (2002)	Article	Designing Collaborative Reflection Supporting Tools in e-Project-Based Learning Environments	学習者

表2. 「collaborative reflection」の先行要件・属性・帰結を導くコード

先行要件	コード
他者との距離や関係性へのジレンマ	患者との関係や患者との距離, 患者家族との関係へのジレンマ 同僚やパートナーとの関係へのジレンマ
現状に対して疑問や不安, 困惑を感じる	教員が現状を疑ったときにはじまる 教員が感じる疑問, 不安, 困惑 教育計画や教育方法に疑問を持つ 視覚に関する感情的反応 学生の理解度について考える
認知的葛藤やリアリティショックの解決ができない	教員のリアリティショック 教員のバーンアウト 行動と新しい情報や知識の矛盾という認知的葛藤を解決できない
属性	コード
教育現場や職場など, 多くの状況やコミュニティの場で起こる	大学教育によりリフレクションを行う 教員の大規模なコミュニティ 職場では, 仕事の間, 他の多くの状況で起こる
リフレクションのプロセスを辿りながら自分自身をリフレクションする	自分自身のリフレクションのプロセスが必要 自分自身でリフレクションを行う 実践からの経験をリフレクションに移行する
理論に基づき他者に経験を語る	学生の臨床経験が必要 学生が経験について話す 経験と理論に裏付けられる
知識や信念や哲学を基に問題解決のための行動を計画し実践する	教員が教育プロセスを計画し, 同僚と利用する 教員の信念 教員の教育実践 教育者自身が実践について学ぶ状況を作り出す 知識と哲学を基に看護援助を実践する 知識だけで導かれるものではなく, 問題解決のプロセスが重要 学習者の思考を明確にし, 思考を発展させるための意見を促す
他者との対話による信頼関係と相互作用によって起こる	対話と相互支援によって達成する 協力教員, 監督者, 同僚との対話 教員と他の利害関係者が重要 話し合うこと 学生が語る仮説を教員が疑う 同僚による支援 同僚からのフィードバック 参加者が重要な役割を果たす アクティブな参加者の相互作用によって起こる 参加者がお互いに交流し質問する プロセスには「信頼」が必須である 学生との交流が大切 同僚は教員のリフレクションを促す 能力のある仲間の助けが必要
専門家やファシリテーターなどによる支援や相互作用によって起こる	ケース・プレゼンター, チューターが重要な役割を果たす 教員, 専門家, ファシリテーターの相互作用によって起こる 支援者の存在 教員の指導と学習に対する対話のリフレクションを導く 教員との関わりや知識が促進する サポートする体制に影響を受け, その支援によって相乗効果を得る メンター, 監督者, 教員との友好的な雰囲気 メンター, 監督者, 教員との信頼関係と相互理解 研究者, スーパーバイザーは教員のリフレクションを促す 教員の助けが必要
他者の経験を自分の学びに転換する	他者の経験を自分に置き換える 間接経験を自分の学びに転換する

表2. つづき

帰結	コード
様々な視点からの見直しによる相乗効果をもたらす	視点の広がりや深まりをもたらす グループ内での相乗効果をもたらす グループで思考を深める 様々な視点からの見直しや認知的葛藤を通じた意見の修正を行う グループで思考を深める
学習者のニーズを満たし、有効な話し合いにより新たな挑戦を導く	学習者の思考の明確化 学習者の思考の発展 学習者のニーズを満たし、新たな挑戦を導く 互いを平等なパートナーと認識し教育学的接近がなされる 教員同士の話し合いを有効にする
道徳的で感情的なリフレクションを促進し、リフレクションの効果が高まる	リフレクションの効果を高める 医療従事者の視覚と解釈のスキルは患者ケアに関連する 教員のリフレクションがより深まる 教員と学生の道徳的で感情的なリフレクションを促進する より効果的なリフレクションを行うことができる
専門職としてのアイデンティティの獲得による専門性の発展	理論と実践のギャップを埋める 専門職としてのアイデンティティの獲得 個人と専門職としての成長を促す 教員の専門性の発展 個人の成長 教員の専門的な成長につながる 参加者の専門性の発展につながる 外国語教育に前向きな影響を与える

面や空間を示す文献があった。

C. 概念分析の結果

1. 概念を定義づける属性

属性 (attributes) について明記していたのは、16 文献中 13 文献であり、42 のコードから 7 つの属性を抽出した (表 2)。以下、コードを「 」で示し、属性を【 】で示す。まず、「大学教育によりリフレクションを行う」、「教員の大規模なコミュニティ」、「職場では、仕事の間、他の多くの状況で起こる」というコードから、【教育現場や職場など、多くの状況やコミュニティの場で起こる】と命名した。次に、「自分自身のリフレクションのプロセスが必要」、「自分自身でリフレクションを行う」、「実践からの経験をリフレクションに移行する」というコードから、【リフレクションのプロセスを辿りながら自分自身をリフレクションする】と命名した。その他、【理論に基づき他者に経験を語る】、【知識や信念や哲学を基に問題解決のための行動を計画し実践する】、【他者との対話による信頼関係と相互作用によって起こる】、【専門家やファシリテーターなどによる支援や相互作用によって起こる】、【他者の経験を自分の学びに転換する】と命名した。看護師の C.R. に関する文献 (Durham & Hancock, 2006) のコードは【理論に基づき他者に経験を語る】、【知識や信念や哲学を基に、問題解決のための行動を計画し実践する】に含まれていた。また、支援者である教員や専門家、ファシリテーターが重要な役割を果たすと述べている文献は 5 文献あったが、具体的な役割は記

述されていないかった。

2. C.R. のモデル例

以下に示す事例は、著者が過去に経験した事例を基に作成した。

看護師 A, B, C はそれぞれ異なる病院で新人看護師の指導を担当していた。A, B, C はそれぞれ自分自身をリフレクションしながら指導しているが、新人看護師への指導に悩んでいた。ある時、院外研修で、共にグループディスカッションをする機会があった。A は、新人看護師に積極性がないため厳しく指導してしまう、と話した。また B は、新人看護師の気持ちも理解できるため、厳しい指導をしづらいと話した。更に、C は、命を預かる仕事であり厳しさも必要ではないかと話し、お互いに経験を語った。ファシリテーターの進行により、それぞれの指導方法のメリットやデメリットを話し合い、自由に語る事ができた。新人看護師へどのような指導が必要か、指導者としてどうあるべきか、他者との話し合いを通して改めてリフレクションする機会になった。

この事例では、新人看護師への指導方法について自分自身をリフレクションした上で、職場を超えた C.R. に参加し、他者との対話や、ファシリテーターの支援による相互作用によって、お互いのリフレクションが深まっていた。

3. C.R. の補足例

補足例には、境界例、関連例、相反例、考案例、誤用例があるが、本稿では、相反例について著者が過去

に経験した事例を基に作成した。

入院患者Dが夜間にベッドから転落したため、翌日の朝、師長の指示でカンファレンスが設けられた。参加者は、師長、リーダー、受け持ち看護師と、当日のDの担当看護師であった。夜勤の看護師から、患者は自宅の布団で寝ていると思っていたと情報提供があった。師長は受け持ち看護師の看護計画の不備を指摘し、入院時のオリエンテーションを見直すべきではないかと指導した。また、リーダーは当日の担当看護師に、転倒予防について患者に指導をするよう促した。

この事例では、病棟内の看護師のみの話し合いであり、参加者がリフレクションをして話し合いに臨んでいない。また、支援者が存在せず、上司の指導を受ける場になっており、自由な意見交換ができていないと言いがたい。

4. C.R.の先行要件と帰結

先行要件 (antecedents) について明記していたのは、16文献中8文献であり、10のコードから3つの先行要件を抽出した。以下、コードを「 」で示し、先行要件を【 】で示す。

まず、「患者との関係や患者との距離、患者家族と

の関係へのジレンマ」、「同僚やパートナーとの関係へのジレンマ」というコードから、対象者を「他者」と表現し、【他者との距離や関係性へのジレンマ】と命名した。次に、「教員が現状を疑ったときにはじまる」、「教員が感じる疑問、不安、困惑」、「教育計画や教育方法に疑問を持つ」、「視覚に関する感情的反応」、「学生の理解度について考える」というコードから、きっかけとなる事象を「現状」と抽象化し、【現状に対して疑問や不安、困惑を感じる】と命名した。更に、「教員のリアリティショック」、「教員のバーンアウト」、「行動と新しい情報や知識の矛盾」という認知的葛藤を解決できない」というコードから、解決すべき現象を「認知的葛藤とリアリティショック」と捉え、【認知的葛藤やリアリティショックの解決ができない】と命名した。また、看護師のC.R.に関する文献 (Durham & Hancock, 2006) では、先行要件に関する記述はなかった。

次に、帰結 (consequences) について明記していたのは、16文献中15文献であり、23のコードから4つの帰結を抽出した。帰結では、【様々な視点からの見直しによる相乗効果をもたらす】、【学習者のニーズを満たし有効な話し合いにより新たな挑戦を導く】、【道徳的で感情的なリフレクションを促進しリフレクションの効果が高まる】、【専門職としてのアイデンティティの獲得による専門性の発展】

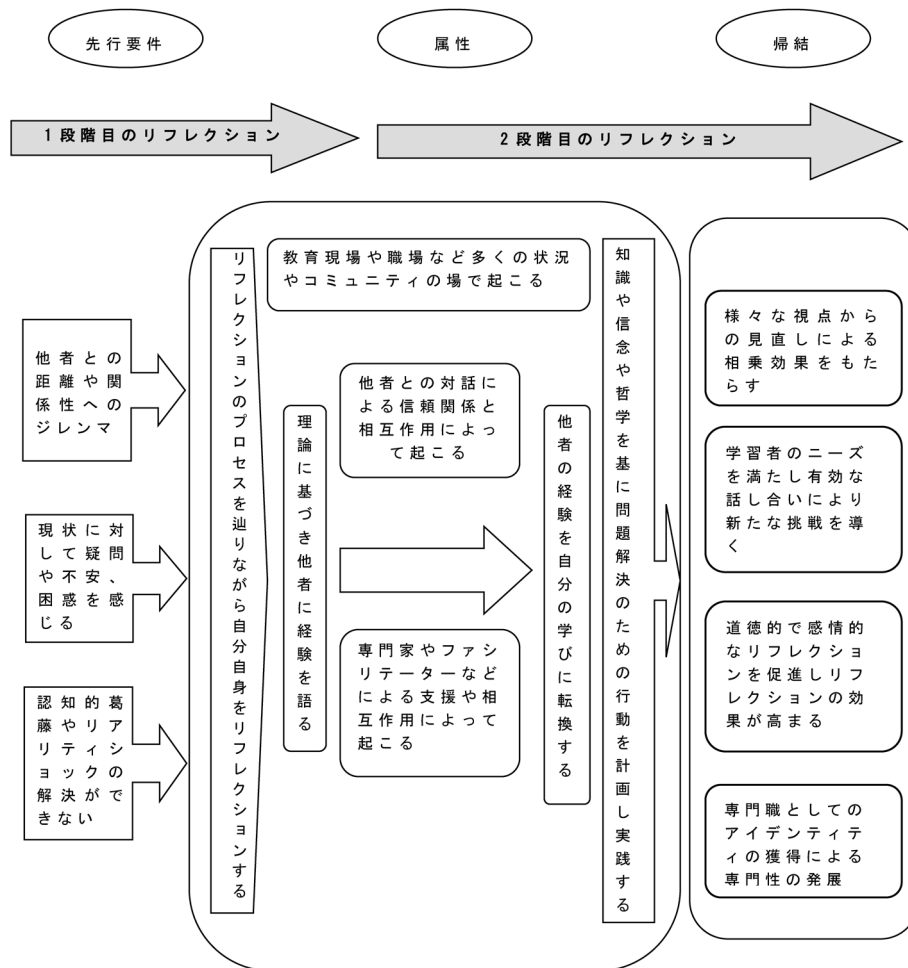


図1. 「collaborative reflection」概念の構造

たし、有効な話し合いにより新たな挑戦を導く】、【道徳的で感情的なリフレクションを促進し、リフレクションの効果が高まる】、【専門職としてのアイデンティティの獲得による専門性の発展】と命名した。また、16文献中7文献が、C.R.の結果、専門職としての発展や成長につながると述べていた。看護師のC.R.に関する文献(Durham & Hancock, 2006)では、帰結に関する記述はなかった。

5. 経験的指示対象

経験的指示対象(empirical referent)は、その現象の存在によって概念自体の発生を例示する実際の現象である。C.R.では、“疑問や不安、ジレンマを感じている人々が集い語り合う”や、“他者の意見を自分の事として認識し、自分の体験として捉える”が該当する。

D. C.R. の概念の構造と定義

16文献から、3つの先行要件と、7つの属性、4つの帰結を命名し、C.R.の概念の構造を明らかにした(図1)。C.R.は、他者との距離や関係性へのジレンマを感じたり、現状に対して疑問や不安を抱き、認知的葛藤やリアリティショックの解決ができないことをきっかけにはじまる。そして、リフレクションのプロセスを辿りながら、まずは自分自身のリフレクションを行うという過程が1段階目のリフレクションである。次に、他者との語り合いの場において、理論に基づき他者に経験を語ることで、他者との対話による信頼関係と相互作用が起こり、更に、専門家やファシリテーターなどによる支援や相互作用によって、リフレクションが深まっていく。そして、他者の経験を自分の経験として捉えることで、知識や信念や哲学を基に問題解決のための行動を計画し実践することができる。その結果、様々な視点からの見直しによる相乗効果をもたらし、学習のニーズを満たし、有効な話し合いにより新たな挑戦を導くことができる。そして、道徳的で感情的なリフレクションを促進しリフレクションの効果が高まり、専門職としてのアイデンティティの獲得により専門性の発展に至る。すなわち、個人のリフレクションでは解決し得なかった事象を、C.R.によって思考を深めることで、リフレクションの相乗効果となって現れる。その結果、リフレクションの効果が高まっていくという過程が、2段階目のリフレクションである。

以上のことより、C.R.を「ジレンマや困惑をきっかけに自分自身をリフレクションして問題解決に向けて行動し、その経験を多種多様な人々と語り合うことで、他者の経験をも自分の学びに転換し、リフレクションの相乗効果をもたらす一連の思考過程」と定義した。

V. 考察

リフレクションは、いつもとは違う複雑な状況や経験(Rogers, 2001)、不快な感情や違和感をきっかけ

に始まる(田村・池西, 2014)。また、実践の結果が上手くいかないという戸惑いから探究的プロセスをスタートさせることが報告されている(河井, 2017)。C.R.においても、他者との関係へのジレンマや現状への不安がきっかけとなり、自分自身で問題が解決できないことが先行要件となっており、リフレクションとC.R.の始まりは同様である。しかし、【リフレクションのプロセスを辿りながら自分自身をリフレクションする】という属性があるように、C.R.の前提として、自分自身をリフレクションする能力が求められる。個人のリフレクションである1段階目のリフレクションで解決できないときにこそ、お互いのリフレクションを語り合い、2段階目のリフレクションを深めていくことが重要である。

また、リフレクションは、自己と対峙することで価値観が脅かされ、自己を責める危険性が指摘されている(青木, 2003)。補足例で示したように、自由な意見が述べられない場ではC.R.は成立しない。お互いに利害関係のない関係性を保持するためにも、モデル例で示したように職場や職種を超えた多職種とのC.R.が、より深いリフレクションを導くと考える。

C.R.では、信頼関係を基本として対話がなされ、相互作用が起こることが明らかになった。そのため、専門家やファシリテーターなどの支援者は、C.R.の場にいる参加者同士の関係性を構築した上で自由な語りを導き、リフレクションを深めるという重要な役割を担っていると考えられる。リフレクションの概念分析では、支援者の存在意義は明らかにされておらず(小山, 2019)、研究対象とした文献には、支援者の存在が必要とされつつも、その役割については明確になっていなかった。他者の語りを自分の経験として捉えることができるようになるために、今後、支援者の役割について検討していく必要がある。

また、C.R.は、教育現場や職場など、多種多様なコミュニティの場で起こり、仲間同士の連携と信頼関係が求められる。近年、急速に進む超高齢社会においては、多職種連携の重要性が問われている。更に、個人が所属する組織の境界を超えて語り合うことは、自分の仕事や業務に関する内省を導く(中原, 2010)という観点からも学習効果が期待できる。リフレクションとC.R.の違いは、そのリフレクションの場に多種多様な人々が存在することである。看護実践の場においては、常に対象者やその家族との関わりが必要であり、実施した看護をリフレクションする能力が求められる。その際に、自分自身のリフレクションを踏まえて、多職種を交えC.R.を行うことで、相乗効果をもたらす。対象者への看護の在り方についてリフレクションを続けていかなければならない。常に自らの看護援助をリフレクションし、より良い看護を目指して多職種と連携して業務を遂行する看護実践の場において

は、C.R.の概念が有用であると考えらる。

VI. 研究の限界

C.R.の概念分析の結果、C.R.の先行要件について示していたのは8文献に留まっていた。先行研究が少ない状況での概念分析であり、本研究の限界であると考えらる。

VII. おわりに

本研究では、C.R.の概念の構造について分析し、C.R.を「ジレンマや困惑をきっかけに自分自身をリフレクションして問題解決に向けて行動し、その経験を多種多様な人々と語り合うことで、他者の経験をも自分の学びに転換し、リフレクションの相乗効果をもたらす一連の思考過程」と定義した。多職種連携が重要視される看護実践の場においては、C.R.が有用であることが示唆されたため、今後はC.R.の支援者の役割について検討していく必要がある。

謝辞

論文作成において貴重なご助言とご指導をいただきました日本赤十字九州国際看護大学 本田多美枝教授、姫野稔子教授に深く感謝申し上げます。

利益相反

本研究の遂行や論文作成における利益相反はない。

文献

- 青木由美恵 (2003). リフレクションの実際—Gibbsのリフレクティブ・サイクルを活用して—. *Quality Nursing*, 9(2), 51–61.
- 青木由美恵 (2014). 看護師における対話的グループ・リフレクションの認識. *関東学院看護学雑誌*, 1(1), 57–64.
- 青木由美恵・Ghaye, T.・Lillyman, S. (2011). 高齢者における地域活動に対するリフレクションの試み. *横浜看護学雑誌*, 4(1), 78–85.
- Binyamin, G. (2018). Growing from dilemmas: Developing a professional identity through collaborative reflections on relational dilemmas. *Advances in Health Sciences Education : Theory and Practice*, 23(1), 43–60.
- Clara, M., Kelly, N., Mauri, T., Danaher, P. A. (2015). Can massive communities of teachers facilitate collaborative reflection? Fractal design as a possible answer. *Asia-Pacific Journal of Teacher Education*, 45(1), 86–98.
- Degeling, M., Prilla, M. (2011). Modes of collaborative reflection. [https://telearn.archives-ouvertes.fr/hal-](https://telearn.archives-ouvertes.fr/hal-00836670)

00836670 (2018/6/12)

- Dewey, J. (1938)／市村尚久訳 (2004). *経験と教育*. 東京：講談社.
- Durham, L., Hancock, H. C. (2006). Critical care outreach 2: Uncovering the underpinning philosophy and knowledge through collaborative reflection. *British Association of Critical Care Nurse. Nursing in Critical Care*, 11(5), 248–259.
- Epler, C. M., Drape, T. A., Broyles, T. W., Rudd, R. D. (2013). The influence of collaborative reflection and think-aloud protocols on pre-service teachers' reflection: A mixed methods approach. *Journal of Agricultural Education*, 54(1), 47–59.
- Flores, R., Krutka, D. G., Mason, K., Bergman, D. J. (2014). From evaluation to collaborative reflection: Teacher candidate perceptions of a digital learner-centered classroom observation form. *Technology and Teacher Education*, 22(4), 401–421.
- 河井亨 (2017). リフレクションのプロセス・モデルの検討—Schönの省察的実践論とEngeströmの探究的学習モデルの縫合—. *京都大学高等教育研究*, 23, 59–68.
- 河野秀一 (2013). 看護マネジメントリフレクション研修の評価と課題. *看護管理*, 23(8), 688–694.
- Kidd, M., Nixon, L., Rosenal, T., Jackson, R., Pereles, L., Mitchell, I., Bendiak, G., Hughes, L. (2016). Using visual art and collaborative reflection to explore medical attitudes toward vulnerable persons. *Canadian Medical Education Journal*, 7(1), 22–30.
- Kim, D., Lee, S. (2002). Designing collaborative reflection supporting tools in e-project-based learning environments. *Journal of Interactive Learning and Research*, 13(4), 375–392.
- Kim, M., Lavonen, J., Juuti, K., Holbrook, J., Rannikmäe, M. (2013). Teacher's reflection of inquiry teaching in finland before and during an in-service program: Examination by a progress model of collaborative reflection. *International Journal of Science and Mathematics Education*, 11(2), 359–383.
- Kurczek, J., Johnson, J. (2014). The student as teacher reflection on collaborative learning in a senior seminar. *Journal of Undergraduate Neuroscience Education*, 12(2), 93–99.
- Lin, H-S., Hong, Z-R., Yang, K-K., Lee, S-T. (2013). The impact of collaborative reflection on teachers inquiry teaching. *International Journal of Science Education*, 35(18), 3095–3116.
- Loh, J., Hong, H., Koh, E. (2017). Transforming teaching through collaborative reflection: A singaporean case study. *Malaysian Journal of ELT Research*, 13(1), 1–11.

- Mede, E. (2010). The effects of collaborative reflection on EFL teaching. *Procedia: Social and Behavioral Sciences*, 2(2), 3888–3891.
- 目黒悟・永井睦子・貝瀬雅弘・原寿子・秋元恵子・前田馨子・山口真弓 (2016). 日本看護学教育学会誌, 26, 139.
- 村松照美・渡辺勇弥 (2008). 市町村新任保健師と熟練保健師の対話リフレクションの意味. 山梨県立大学看護学部紀要, 10, 49–58.
- Murray, E. (2015). Improving teaching through collaborative reflective teaching cycles. *Investigations in Mathematics Learning*, 7(3), 23–29.
- 中原淳 (2010). 職場学習論—仕事の学びを科学する—. 東京：東京大学出版会.
- 小山理英 (2019). リフレクションの概念分析. 第39回日本看護科学学会学術集会 (抄録).
- Rogers, R. R. (2001). Reflection in higher education : A concept analysis. *Innovative Higher Education*, 26(1), 37–57.
- Schön, D. A. (1983). *The Reflective practitioner: How Professionals Think in Action*. U.S.A.: A Member of the Perseus Books Group, 21–30.
- 渋谷美香 (2001). 看護技術学習における学生の意味構成を支えるリフレクション. *Quality Nursing*, 7(8), 13–19.
- 田村由美・池西悦子 (2014). 看護の教育・実践にかすりフレクション—豊かな看護を拓く鍵—. 東京：南江堂, 27.
- Tigelaar, D. E. H., Dolmans, D. H. J. M., Meijer, P. C., de Grave, W. S., van der Vleuten, C. P. M. (2008). Teachers' interactions and their collaborative reflection processes during peer meetings. *Advances in Health Sciences Education : Theory and Practice*, 13(3), 289–308.
- Veen, M., Croix, A. (2017). Collaborative reflection under the microscope: Using conversation analysis to study the transition from case presentation to discussion in GP residents' experience sharing sessions. *Journal Teaching and Learning in Medicine An International Journal*, 28(1), 3–14.
- Walker, L. O., Avant, K. C. (2005) / 中木高夫・川崎修一 訳 (2008). 看護における理論構築の方法. 東京：医学書院.